

新秋特別興行

文樂座

人形淨瑠璃



文樂座

橋つ四

一部 金十五錢

新秋九月。まづ皆様の御健康を祝福いたします。

爽涼の氣充ち満ちて精興一段と華々しき折柄夏の興行に於て空前の好成績を擧げ得ました當文樂座人形淨瑠璃はこの新秋陣を皆様の興味本位に依りその待望に應へること、致しました。茲に名狂言を並べ若手連に、巨頭を据へ爽秋九月興行の絶体精銳軍として郷土藝術の饗宴を展くもの淨瑠璃の大坂人としての皆様の御聲援を俟つ次第で御座ります

昭和五年九月一日

四ツ橋

文樂座

昭和五年九月一日初日

初日 午後三時開幕  
二日目より 午後四時開幕

二日目よりの

・御觀覽料・

- 一等お座席 御一名 金三圓
- 一等椅子席 御一名 金二圓五十錢
- 二等席 御一名 金一圓
- 三等席 御一名 金五十錢

一等お座席 御一名 金三圓

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七二一番  
專用電話 七四〇八番  
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカトツ廣告掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪西區土佐堀通一丁目  
長三〇四九番  
長四〇四九番  
長四九四番  
土佐堀(44)



# 文樂座是人形浄瑠璃

## 九月興行 二日目の 豫定時間割

### 前八陣 守護城

浪花入江の段 (午後四時開幕の豫定)

御休憩時間 幕間約十分間の豫定

圭討之助早打の段 (四時四十分開幕の豫定)

正濟 本城の段 (五時十分開幕の豫定)

御食事時間 幕間約二十分間の豫定

### 中 双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段 (六時四十分開幕の豫定)

御食事時間 幕間約二十分間の豫定

### 次 三十三所壺坂寺

瀧市内の段 (八時十分開幕の豫定)

御休憩時間 幕間約十分間の豫定

### 切 戀飛脚大和往來

新口村の段 (九時二十分開幕の豫定)

(打出し) 十時二十五分の豫定

(舞臺裝置 松 田 種 次)





## 二代目義太夫の鴻業

二十四歳で櫓下となる

土を耕し、種を蒔き、三十餘年の永の間、毎日、いほにかけて育て、來た、義太夫節がやう／＼に緑の葉を出し、末の繁茂を見せやう／＼としてゐる時、惜しいかな主の義太夫は死んでしまつた。もしもこの若樹を、このまゝ捨て、置いたら、云ふまでもなく、そのまゝ枯れ果て、了ふであらうが、天義太夫の誠意を嘉納まし／＼、美ごさな後繼者を義太夫にくだされた。

話はずこしもこへ廻る。正徳四年九月十日、一座が杖さも柱さも頼む義太夫に先立たれた、多くの門弟や竹本座の連中は、悲痛哀傷のうちにも氣にかゝるは、明日からの竹本座の運命である、さうして更に適切な問題は、義太夫に代るべき櫓下の名前主である、これは一日も忽に出來ぬことだつた。いつたい誰れになるだらう、さかうお互ひには云つてゐるものゝ、そこは

人間の淺間しき、高弟達の中では、内々肚づもりで此名譽を荷べきもの、先づ俺れを措いて他にはなからう我が我がと取らぬ狸の皮算用をしてゐるものも無いではなかつた。けれどもこれは好都合に、さすがの偉人義太夫ほどの人だ、ちゃんさ自分で後繼者を選んで遺言状を作つて置いたから、先づは醜い争ひなどは起さないで、直ちに決定をする問題になつてゐた。そころが開いて見ると意外さも意外、多くの門弟達はあつこ驚いて呆然自失してしまつた。これは門弟達の驚きに無理はない。我が身の上にはふりかゝる大問題だ、傍で聞いてゐたその座の關係者達さへ容易に信ぜられないで己の耳を疑つたのだ。そころが遺書には判然と、門人利和竹政太夫の名が認められてゐる。故參の門弟には相當の年輩で、既に一家を爲してゐる人さへある、

俺れが俺れがさ内々鎬を削つてゐた連中は、驚きより一層、なんだ馬鹿々々しいと、寧ろ腹を立てゝゐる手合ひも中にはあつた。逆恨みながら義太夫の肚のうちをさへ疑つたものもある。それもその筈、政太夫は新參も新參、遙かごん尻に控へてゐるまだ二十四歳の青二才であつたのだ。だが恨んだつて憤つたつて、追つくわけのものではない、嚴然たる先師が遺言であるごこか見ごころがあつての上に違ひない、もさより悟りきれない連中は、いつまでも、ぐずぐずと云つてゐたが、幸ひにも先師の友人として、物の解つた準後見格の近松門左衛門がこのごたぐを圓満に鎮めてしまつて、幸ひに事なく濟むには濟むのだが、さて若輩の政太夫が、義太夫節の總旗頭、竹本座の統領、名譽ある樺下に納まつて、果してその責任を盡さるや否や世間注視の問題に移つて行つた。

この晴がましい位置に据られた政太夫、先師の遺訓を身にしまして、大覺悟をもつて臨んだにはちがひないが、悲しいかな、さう一時に信用は繋がない。二三興行は殆んど成績不良、おまけに、不平黨の旗頭大和太夫などは二三の連中を引連れてサツサ退座して行

くさいふ心細さである。何んかしなければ竹本座ももう此のまゝ亡びてしまふのではないかと思われるやうな状態になつて來た。義太夫歿後、座の後見格になつてゐる近松は、己が執りなした政太夫を此際なんぞか救はねばならないと、それは／＼日夜苦心慘憺してさう／＼『國性父合戦』を書き卸した。奇抜な趣向と舞臺面の變化と例の妙筆とでおもしろく出來てゐる上に、政太夫が決死的努力で遂にこれを大成して、一度に人氣を取り返し、古往今來類を見ぬ劇壇に於ける大記録を作つて、三年越し十七ヶ月に亘る連續興行をしたさいふのだから凄じい。かうなるご次第に調子がついてくる上に、脱退をした者も歸つてくる、政太夫の名聲は日に／＼高まつて行つて、はじめた義太夫の睨んだ眼に狂ひが無かつたごがわかつて來た。

異數の拔擢と、門左衛門の愛撫によつて、嶄然頭角を現はして來た政太夫はもさより凡人ではない。暫く彼の閱歷を見てみる。

元祿四年、大阪嶋の内三ツ寺に生る。藤姓水原氏、字播磨屋長右衛門、幼名長四郎、諱は喜教、又は文正翁。家は中紅家と云つて資産家であつたらしい。幼少

から淨瑠璃を好んで、素人天狗の仲間でも、頭抜けた天才であつた。やがて長四郎は斯道の誰れもが羨んでゐる、見識のある大夫になりたいたいの志を立て、義大夫の門に入つた。彼ればその後熱心に稽古を勵んで、早く舞臺へ立ちたいといふ望みを起し、師匠にそのことを頼んだが、なか／＼それは許されなかつたのである。といふのは、當時は演し物が五幕あるとすれば、その五幕ともに切場は櫓下が勤め、端場を他の大夫が勤めるといふ習慣だつたから、芝居出勤と云ふことになることなか／＼後輩にお鉢が廻つて來ない、それにもう一つ大夫としての當時の重要條件が、音吐朗々たる大聲が、或は艶麗玉の如き美音家で無くてはならなかつた。ところが不幸にして彼長四郎には、そのどちらの一つも備はつてゐないのである。美ご落第した。ところが本人なか／＼諦められない。すぐ隣の東の芝居に櫓を上げてゐる豊竹座の方へ行つて、その舞臺へ上げて貰ふことになつた、勿論師匠の許可を得てゐた。この時寶永七年、彼二十歳である、それからやがて京都へ移り、また大阪に戻つて、こんどは曾根崎の芝居へ出たりしてゐた。その二年間の彼はウン

腕を磨いて、天才の閃きがおい／＼濃厚にあらはれ始めて來てゐた。そこへ思ひがけなく先師義大夫から、竹本座へ出勤せよといふ吉報が齎らされたのである、彼れば始めて己れの素志が貫徹したことを悦んだ。義大夫の思はくでは、現在はいさゝか、これから先の義大夫節は、どうも今までのやうな聲ばかりでは不可ない、義大夫節百年の大計はやはり藝の内面にある、ところが最近政大夫を聞いて驚いた。彼は聲はないが、その無い聲で、人情の微を穿つた語りぶり、チラ／＼と義大夫の思ふ圖に當つてくる。こゝに義大夫の想像してゐる、聲よりも腹で語る、といふ新しい天地が爪かに見えるやうな氣がした。で、さりあへず我が手元へ呼び返している／＼と薰陶をして見た、ところがその鋒銚が次第に現はれてくるので義大夫は非常に満足した。正徳二年三月といふから、義大夫の死ぬ二年七ヶ月前のこと、竹本座では「丹波與作」が出て、政大夫に道中双六の場をお目見得に語らせたのである、大方のものは情味の豊かな語りぶりに舌を巻いたそうだ。そんなわけで、義大夫は、さう／＼多くの門人の中から政大夫を後繼者に拔選したのであつた。果せる

かな、この政太夫が、大物も大物、素晴らしい名人になり、義太夫節をして遂に千年の長命者に育て上げ、師匠ではまだ完成しなかつた。近松の世話物を思ひの盡に語りわけて偉業に於ては、とても匹敵する者がない。

それは一つは近松の子を見るやうな慈愛に哺くまれ政太夫がまた祖父に盡すやうなまご、があつたればこそ（實際に於ても近松が六十三歳、政太夫二十五歳）かういふ美しい實を結んだわけだが『天網嶋』『女殺油地獄』『宵庚申』『國性爺』『會稽山』『關八州繫馬』かういふ代表的名作はみな政太夫によつて完成されたのである。而かも彼の優れた點はその技藝ばかりではなく、實にその珠の如き人格にある。當時の儒者であり近松半二の親であつた穂積以貴はかう評してゐる。木訥自ら守り、華美粉飾を避け、邊幅を飾らなかつたから一見尠々として野人の如し、これは藝人としては珍しい事で、後年その徳を慕ふて門に集まる者多く門人の如き、式太夫、佐太夫、包太夫、七太夫、志摩太夫、紋太夫、百合太夫、政太夫（二世）西太夫、を重なるものとして數へ切れないほどである。そんなわ

けで、享保十九年二月。櫛下となつて二十年目に、他から薦められて、二世竹本義太夫を襲名した、もつとも早くからさういふ推薦を受けてはゐたが、遠が先輩に遠慮をして延び延びになつてゐたさういふことである、翌二十年十一月上總少掾を受領。元文三年再び勅許になつて、播磨少掾となつた。その一月祝儀興行として、近松の『天神記』の柘榴天神の條を改作して、一曲物『菅相丞冥加松梅』を出語りで勤めて大好評を取り。かういふ逸話をのこした。それは、門人の脇田氏こそ竹本喜太夫が長崎逗留中、師傳のまゝを、清國人の姑蘇の沈草亭及び吳志明といふ人に聴かせたころが、非常に感銘してその全文を寫しとつて故國へ持つて歸り、改めて故國から、播磨掾へ石印二個を贈つて來た。またこの勅許受領の舞臺で使用したさういふ播磨掾の正本は（表紙藝題から朱草悉く肉筆のもの）現存の義太夫節朱草入正本としては恐らく最古のものであらう、これは私が正しい傳來によつて襲藏してゐる。

劇壇破天荒の大當りをこつた『國性爺合戦』が、たゞにその時かぎりの一時の人氣ではなく後末ごれほど



大きな影響を受けたかといふことは記録する必要がある。政太夫自身としてもその初興行の三年目、享保五年正月、同十六年五月、寛延三年六月の三回の外にも度々上演してゐるが、この作から、五年後に出来た『天網嶋』にも、第一段河床の門口へやつてくるてんがう念佛に、九仙山の文句を取り入れて、

樊噲流は珍らしからず、門を破るは日本の朝比奈…

それ惜いて國性爺の道行念佛が所望ぢや…

或ひは太兵衛の綽名を、李蹈、天と

呼ばせてゐるなどなか／＼國性爺氣分が去らない。尙又享保二年に同じ近松が『國性爺後日合戦』を同七年に『唐船噺今國性爺』を書いて居り。敵方の豊竹座でも、紀海音が『傾城國性爺』を出し。錦文流の方でも又『國仙野手柄日記』といふ文彌節の正本を出した。

さて又歌舞伎の方では、享保元年の秋京の『京萬太夫座』で、榊山小四郎（和藤内）芳澤あやめ（母親）紫崎林左衛かもん（錦祥女）を上演したのを始め、翌二年には道頓堀の竹嶋幸左衛門、櫻山四郎三郎、姉川新四郎の三座で競争興行を始め、竹嶋が優勝してゐる従つて、それが江戸へ飛火して東西双方國性爺流行の

火の手は益々熾んになり、殆ど日本國中國性爺で一ぱいになつた門（甘輝）山本形だ。その影響はやがてまた讀本、草紙、謠曲、繪畫、玩具、人形、菓子、衣裳なんでもかんでも國性爺でなくては納まらなかつた。かくて義太夫節大成の鴻業を爲し遂げた竹本播磨少掾は、延享元年三月、竹田出雲、三好松沼等合作『兒源氏道中日記』の上演中病を得て遂に七月二十五日、行年五十四歳を以て長逝した。舞臺生活三十五年、語り物九十三番を數ふ。

木谷蓬吟著

文樂座今昔譚より



浪花入江の段

前八陣守護城

浪花入江の段  
主計之助早打の段  
正清本城の段

正清 (竹本鏡太夫)  
雞絹 (竹本源路太夫)  
鞠川 (竹本陸路太夫)  
早淵 (竹本播路太夫)  
琴 (竹本龜久太夫)  
豊澤新二助 (豊澤團二助)

この淨瑠璃は「厭蝕太平記」によつて加藤清正を中心とする豊臣家の没落を書いたもので家康の爲に清正を毒殺された條りであります。せいかい北條にもつてゐつて主要人物は凡て別名で表はされてゐます。仍ち森三左衛門は池田三左衛門、兒島政次は後藤又兵衛、佐々木高綱は眞田幸村、大内は島津、主計之助清郷は加藤忠廣、時政は家康、お通の方は淀君に當て、御座ゐます。正清は小田の幼君を抱いて孤忠を盡しますが近江琵琶湖に幼君と正清の乗つた御座

船頭覆の危難も辛うじて免れますが遂に二條城の響應に時政公の爲に毒酒を盛られます。毒酒は知つたお飲まれば違勅の科、森三左衛門は毒盃を取つて犠牲になつた義心に感じ盃を取つたのであります。命數を知つた正清は肥後の本城に引籠り夕陽さゝもに沈む主家の運命を啣ちます。一子主計之助の新妻雞絹は森三左衛門の娘とて離縁され夫に操を立て、自害して果てます。兒島政次佐々木高綱の兩軍師を味方に得た正清は安堵の中に瞑目し、兩軍師は幼君を擁して大内氏に據るさいふ筋になつてゐます。

(床本) 浪花入江の段

歸國を祝ふ棹の謳聲賑はしき召しの舟忠と戀を一夜の風に任する浪の上

人形

加藤正清 吉田榮三  
榊 桐竹紋十郎  
早淵久馬 吉田文之助  
鞠川玄蕃 吉田玉市

主計之助早打の段

豊竹 つばめ太夫  
野澤 勝市

人形

大内義弘 桐竹門造  
鞠川玄蕃 吉田玉市  
妻葉末 吉田小兵吉  
船頭灘右衛門 吉田玉松  
加藤主計之助 吉田玉幸

琴柱に通ふ鷹金も浪花の春をや見捨  
行く時に後より一艘船拍子揃へて  
漕付漕寄加藤氏御見送りとして北條  
の使者早淵久馬御對顔下されよ舳  
板に手をつき述ければ、正清快然と  
障子ひらかせ先例違へず厚志の御使  
異儀なく歸國仕るよきに言上い  
たしてくりやれ太儀くさいふ顔色  
ハテめんよふな正清公御氣分悪ふは  
ござらぬか、アイヤ打晴たる遠見に  
心も一入長閑な海面、ハテめんよふ  
な實正氣持は能ござるか、ハテ異な  
事に念ひ入堅固と言ひふしぎなか、  
アイヤくくく御機嫌よくて主  
人も満足もはやお暇くく船子に目  
くばせそこくに船を廻して漕戻す  
雑絹おかしき押包み申父上折角來な  
から御口上も申上らず齋相な使者でこ

ざりませぬか何さく内意を請て來  
りしならん捨てて今一曲サ所望く  
と打くつるぎ四方に囀く逍遙の、詠  
を琴の緒に寄て浪花入江の身は捨小  
舟沈む思ひは我獨そればへ今朝の別  
れに袖引きこめよ脊の情に酔浮れ河  
内通ひの生駒山其高雄の若楓見んこ  
斗に契りつゝ焚残したる薄雲や伽羅  
の煙りの薰るはしんぞ思はば薰るは  
しんぞ思はばじや、ムゝ水碧に砂子  
明らかなる兩岸の苔、娘も爪音歸鷹  
も返つて飛來るべき浦の景色ア、面  
白しくく見やる浪間をエイサツサ  
くさつこ漣み矢を射る如くおし切  
く追くる早船北條の近臣鞠川玄蕃  
常にかはつて禮讓厚く正清殿御出帆  
の名残を惜む再度の使者此一箱に錢  
別の御心を込められたり歸着の砌開封



にする氣はする氣なれど若殿より大殿がア、コレ〜〜そんな事いやつたら唐迄きこへたこはい殿様眼み殺されふも知れまいぞやチ、それでも百日の間たつたおふたりチホ、いいか様そこも有はいのさ何の遠慮も高咄し後は笑ひの折からに早御上使の御入と案内の聲に悔りし部屋へ入る後玄關よりのけ反通る時政の近臣鞠川玄蕃伴ふ人は隣國に大家と名にし大内義弘優美に餘る長袴しづしづと打通れば出向ふ奥方しとやかに遙こなたに手をつかへお二方とも遠路の御來駕夫正清速にお迎へ申答なれども歸國の日より百日の心願有と閉籠り他門はもこより一家中通路無用と堅い言付日頃の氣質詮方なく女の出向いお赦しなされ下さりませ

と折目高鞠川玄蕃心に黙きスリヤ正清には別間に籠り餘人に對面いたされぬと。併主人北條殿大切なる内意の申上せ直談と立上るを義弘押留め先待たれよ百日の齋戒もけ不満願に及ぶと有暫しの猶豫がサ無にもなるまじ某とて加藤氏に何卒面談致したいイヤナニ奥方よきにお取次サアわらばとて逢見ぬ夫つきそふ娘に言入させこたへ有まで暫しの内ハテむつかしいイヒ、然らば暫時休そく致す大内殿にも客殿へアイヤ拙者は後よりまづお先へソレ腰元と御案内と葉末があしらひ鞠川は胸に工みの舌なめづり案内に連れて入にける義弘後を打なぐめ前後に氣配り聲をひそめ奥方には嘯御心配正清殿の御病疾容体はいかゞござるなエ

何ぞおつしやる夫正清病氣とこイヤサおかくしなされな入魂の義弘他言は致さぬ御大切にござらふがやアわらばとていつぞやより對面いたされ共障子隔て夜毎の窺ひも常にかはらぬ詞付ハテナア此國の分野にあたり主星光りを失ふ天變ム善か悪か名將も暫し疑惑の折こそあれ下りおらふ〜こ口々にさゝゆる奴が首筋元兩手に引きげのつき〜行尺合ぬ上下も借着と見へし大男こしに付けたる繩のはし引づる櫓の菰づ、み宙にぶらりの角介丸平いびつになつて反打たりハ、登り日和の追風を捨是の旦那を見舞ふと態々上つた灘右衛門といふ船頭じやはいハア、いかに様事を分て言を聞けば船頭に違はぬ證據、灘右衛門が荒か



以前森の後室、柵殿私共共に招き寄せ正清病氣の聞へ有汝見舞として本國に馳下り存生ならば使者は私死後の使者は柵殿と生死二つの御教書を二人へ分て賜はりしは父の安危を探らん計畧チエ、憎しきは思へども胸をさすつて取急ぎ着岸の津より後室に先立早駕氣は早鐘かけ來りしも母上に父の様子を聞たいばつかり國の大事を思し召おかくし有は斷りながら心に覺悟も致したし、コレコレ包まず明し賜はれま思ひ込んだる物語り始終を聞て又悔りチ、思ひ合せば最前に合點の行かぬ灘右衛門義弘殿の詞のはし割符を合す今この時宜心元ない夫の安否正すは主計コレ斯々々耳に口そんなら父に付添居る雛絹殿にサそなたも逢て聞か近道ハ

ア畏り奉るコレ必ず密に心得ましたさゆふぐれ時鐘の響は寂滅爲樂胸にこたゆる親ご子か引別れてぞ。

(床本) 正清本城の段

行く先は二重に建し思惟の間、人の出入は止むれど、秋を告來る風の聲庭の木草におこづれて、すだく由さへ物凄き。我本城へ我ながら、心置く露踏分けて、窺ひ來たる主計之助、隔の垣に身を寄せて、母のをしへの綱手繩、引けば鈴虫それぞこは、豫て松虫雛絹が、手燭携へ庭にあり。母様お越遊はしたか、イザ此方へさゆふしでの、神の結の縁ぞこは、思ひがけなき主計之助、ノウなつかしやま雛絹が、切戸押明け走り寄り、夢ではないかさ嬉しさの、後には詞も泣計り詞ヤレ音高しく密に

密に、先何よりは父の身の上、餘人を遠ざけお身一人、おそば仕へ有りさ聞く、物いみなりさは心得ず、コレ様子聞かして下されま、すかしなだめて尋ねれど、こなたは猶もすり寄つて詞コレ申し、久しぶり逢ふた私、無事にあつたかかはらぬかたつた一看おつしやつても、不孝のさかにもよも成まい。其お心さは露しらす、都でお別れ申してより、勿体ないこそ乍ら、父様母様を、思ふ案じはごこへやら、あなたの事が苦になつて、ほんに寢た間もわすれ兼ね、逢ひたい見たいさあけくれに、こがれしたふてゐる物を、聞えませぬさ娘氣に、後や先なるうらみ言、詞ホ、尤もながらそれは内證、けふ國へ歸りしは、我のみならず母御も

同船、湊口より魁せしは、父の安否を尋ねん爲め、コレ御病氣に相違あるまいかの。アイ別間の様子は母様始め、誰にも云ふなミ口留なれど、さうおつしやればお食も少し、折々手箱の草の根を、出しておあがりなされる、計り、亥の刻よりは樓にて、御祈念有るも只お一人。ム、それこそ仔細ぞあらん、母上お聞なされたか。委細は是にて聞きましたと、思ひがけなき切戸のかげ、出づる葉末を見て惻り。様子あかせし案じ顔。母は娘を押し静め、別間に向ひ手をつかへ、詞都の御所より上使として、主計の助參上と、取次ぐ母の詞より、外にこたへもなき折ふし、あやしや庭の草隠れ、あらはれ出でたる數多の鼠、コハいぶかしと三人が、すか

しながむる間もなく、透をつたひて樓閣へ、連々として入るよき見えしが、俄に人聲烈しき物音、スハ一大事さかけ寄る障子、蹴はなす別間は燈火も、消えてわからぬ眞暗かり、數董を相手に正清も、或は捻首手足をもぎ、あたるを幸ひ人つぶて、投出す庭先主計の助、得たりと仕留る早速の働き、後に控へし鞠川玄蕃、正清やらぬさしつかさ組む、ふりほどいてかんづさつかみ、膝に引敷大音上詞ヤア鼠と變じ我居間へ、問者を入れしは時政の家來、忍びに名を得し鞠川よな、首引抜けば安けれど助けかへすは都へ使ひ、我存命を物語れ、宙に握つて互いやつと、投げ越すからだは堀の外、鼠となつて逃げさりけり。主計の助は父の聲、

聞く嬉しさにさし寄つて詞時政より父への使ひ、何にもせよあかしを照し、御教書御披見下されど、椽側に直し置く。披きもやらす高笑ひ、詞ハ、此書面見るに及ばず、日本無双の正清を、味方に付けん何んぞ、は、あさごき計略、ヤイ主計の助、おのれ生年十七歳、忠孝信義の是非をも分たず、大切なる幼君の、守護に殘せし效もなく、時政の甘き詞にたらされて、おめくご歸つてうせたは、女に迷ふ大馬鹿者、御教書なご、は穢らはしと、引さき庭へ投げ捨てたり。主計はハツと赤面の聞なければ母が引取り詞そりや餘りお氣づよい、何ばうお氣に叶はいても、助けられたる恩は恩、あの子の難儀になる事を、思ひ返して給はれと、



母の願ひも慈悲なりし、思案を極め  
 主計の助、座を立上つて、實に誠、  
 詞親子兄弟銜橋さ成るも、戦國の常  
 武士の習ひ、母上御無事さかけ出す  
 を、ア、コレ、其一言の敵味方  
 侍の義と云ひながら、母が悲しさ  
 此子が思ひ、後の歎を推量して、マ  
 ア、待つてたもいのこ、母が諫に  
 雛絹も、たまへお返事遅くとも、父  
 上都にましませば、お首尾悪うはな  
 されまい、頓て母様お越まで、待つ  
 て給はれ待つていのう、詞コレ、  
 申し舅御様、親子夫婦の生別れ、不  
 便と思し只一言、お留なされて下さ  
 りませ。お慈悲くご手を合せ、拜  
 む内にも戀人に、離れ難たなき女氣  
 は、哀れにも又いぢらしき、詞ホオ  
 娘が願ひ去る事乍ら、執なしすべ

き三左衛門は、ごくに落命いたしつ  
 らんが、女の縁に主計の助、其身を  
 立つる心なるや。アイヤ、父上の御  
 意共存せず、三左衛門殿死去有る事  
 御存し有れば猶もつて、御身の上氣  
 づかばしく、立歸りしは變ある時、  
 此の本城を守らん爲め、ハ、ハ、ハ、  
 何さ、譬いかなる變ある共、六  
 十餘州さ釣かへの正清も此本城、い  
 つかなく人手に渡さぬ、此身此儘  
 樓にて、四海を守護する我精神、  
 あさ構はずさ幼君へ、忠義を立つる  
 心を見せよ、親子の對面是限り、  
 烈しき詞諸共に、ばたま立切る障子  
 の内詞ハア其賢慮を聞く上は、所存  
 を立て、御目にかけん、此一封は雛  
 絹殿、後にて披見致されよ、母上様  
 御さらばと云捨て、こそかけり行く

ノウコレ待つてご雛絹が、夫を慕ふ  
 娘氣に、よべご詮方泣き倒れ、伏沈  
 みたる計りなり。泣聲聞いて母、  
 小影を立て傍に寄り、詞ノウ雛絹  
 何ぼうこがれ慕ふても、主計殿には  
 添れぬわいのう。ヤアか、様か、  
 そりや又何故でござります。オ、驚  
 きは尤もぢやが、コレ夫の最期もお  
 主の業、恨に甲斐なき家來の我々、  
 縁を切られば主計殿は、時政公に助  
 けられし、恩に命を捨てればならぬ  
 コレ引別るも、揉ぢやご、諦てた  
 もいのう、證據は残せしソレ其文  
 忍びの燈火差寄すれば、涙ながらに  
 押開き詞ナニく父の仇たる時政の  
 忠臣森氏の娘なれば、所詮添はれぬ  
 敵同士、縁切る上は一旦の恩も情も  
 是限り、ハアはつご計りに讀さして

正体涙にくれけるが、覺悟極めて  
懷刀、咽にがばと突立つれば、は  
つと驚く母と母。ヤレ早まつた何事  
と抱起して介抱に、娘は苦しき顔を  
上げ詞ノウ早まつたこは愚の仰せ、  
主計様に添れずば、斯う成り行くは  
身の覺悟、ア、思へば果ない私か身  
の上、父の最期と云ふ事も、今聞く  
迄は夢にもしらず、御無事でござる  
と思ひ詰め、仇に暮した不孝者、其  
罪科が報ひきて、二世を誓ひし戀仲  
も、けふを限りと成果した、可愛い  
事ぢやとおぼし召し、未來は女夫に  
ならるゝ様、執成頼み上ますと、今  
死る身の際までも、輪廻に迷ふ心根  
を、思ひやりつゝ二人の母、いちぢら  
しいやら可愛いやら、胸一杯にせき  
上げて、こかうの詞泣倒れ、心も亂

る、計りなり詞ホ、雛絹が最期の願  
ひ、加藤主計の助清郷、是にて承知  
いたせしと。ひらく閣には父正清、  
以前にかける六具の出立、妙法蓮華  
の七字の旗、主計が俗名書添へて、  
弓手に押立て座したる姿、武威三軍  
に鳴ひつき、唐國迄も今の世に、お  
ぢ恐るゝも理なり。妻は見るより  
詞ヤア、我子の佛果を其旗に  
お書き有りしは死ぬるのを、御存じ  
あつてか何故にさ、問ふもうるゝ  
雛、親子、俱に様子を氣遣へり。詞  
オ、時政の恩を請けまじと。我強く  
云ひしは都にて、命を捨てよと致へ  
る謎、親が胸中能く知つて、歸國以  
前に雛絹へ、離縁の状を認めしは、  
女に心引されず、忠義に死る作が潔  
白、ハ、ア徳氣にも出かしたり、そ

れに連添ふ身程有り、娘が貞女も育  
がら、我子へ立つる心の操、ホ、  
適なり雛絹、敵と成り味方と成る  
も此世の業、せめて未來は佛果の縁  
結んでくれんと此旗に、二人の俗名  
書付けしは、親がゆるせし夫婦のか  
ため、コリヤ寂光淨土に生を受け  
妻よ夫と睦じう、誰憚らず添ひこげ  
よ。南無妙法と閉づる目に、不便の  
涙はらゝゝ、唱ふる經も口の中  
手負ひの耳に通じけん。詞エ、有難  
うござります、其お許しを詞きまし  
て、嬉しう成佛いたしまする、主計  
様には覺悟さは、悲しい中にも私  
樂しみ、あの世の道で待合せ、一  
つ所に参ります、二人の母様舅御様  
御息もじてと計りにて、娑婆の名残  
はにつこりさ、笑ふて息は絶えにけ

り。ハア悲しやま柵葉末、死骸に  
 取付き抱きしめ、身も世もあられぬ  
 悔言、詞生れて此かた二親の、手も  
 ばこそ、百里二百里此國へ、勇す、  
 んで只一人、來た心根がいぢらしい  
 夫婦さなつて其日から、國さ都へ引  
 わかれ、死る今迄一夜さも、添臥し  
 もせぬ薄い縁、結んだ神も恨めしい  
 そればかりか夫にもおくれ、残る一  
 人のいさし子の、自害するのを見や  
 う逆、はるく來たは何事さ、甲斐  
 亡骸を右左、おしや可愛の數々を、  
 露置く葉末柵も、數へ立て數へ立  
 て、涙々は漲りて、満くる汐の荒岬

浪打寄するわ如くなり。歎きの中へ  
 灘右衛門、息を切らしてかけ戻り詞  
 コレ旦那殿、小陸に忍んで様子を聞  
 き、息子殿を助けうこ、追つかけた  
 一里の松原、長持へ入れかけ出す所  
 南無三寶さ走付き、組んづ轉んづし  
 て見たが、多勢に無勢雲霞、跡に残  
 つた此状箱、上書は加藤氏へ、湖水  
 の某、お前は知つてござりますか  
 と差出す、様子を聞いて正清は、物  
 をも云はず封押切り、詞八十川の其  
 源は變るこも、心近江の末をみつ  
 うみ、フウハレ心地よき秀句ぢやな  
 さ、吟するこなたに聲高く詞ホ、ウ  
 その歌の心は大内義弘、疾より是に

て承知せり、正清殿に對面せんさ、  
 明智の大將物蔭より、欣然として出  
 たまひ、携へ持つたる藁菴の、中な  
 る劍取り出し、詞憶及にあらはす足  
 下の本心、よく見られよさ差出せば  
 仔細あらんま頂戴有り、まつく詠め  
 て拔放せば、俄に一天照かやき、  
 北斗に映する劍の光、赫々たる其有  
 様、正清はつこ押し戴き、詞これぞ  
 北辰尊星より、授かる處の七星丸、  
 それがし年來守護せし名劍、幼君の  
 御味方になるべき勇士を選出し、劍  
 を渡し下されよと、片岡殿へ頼置き  
 し甲斐あつて、劍を證據に來たられ  
 しばそれなる船頭、誠は備前の住人

兒島元兵衛政次殿、今日只今幼君の味方に屬する割符の一腰、慥に落手仕るさ、劍を鞘に納むれば、詞異議なく兒島元兵衛、眞中にどつかさ座し詞ホーナ、適眼力正清殿、片岡氏に盟約せし。我本名を葉苞に、包みかくべし劍の割符、後藤元兵衛政次なり、某味方に屬する上は、先君恩顧の諸侯と語りひ、スハ合戦の時來らば、近江路に根城を構へ、美濃信濃路へ出張して、時政も多數を切所にさへ、追詰めし泡吹せ狸親仁が白髮首、引さげんは瞬く内我方寸の胸にありさ、勇みすゝみし勢ひは軍師さこそばしられけれ。義

弘につこぞ打笑ひ、詞ホー、コハおこがましき兒島が廣言、國威たる北條に、又向ふ心底聞捨ならず、併し小田家より思義を請し事なれば、只何事も餘所に見ん、今の一首に八十川や其源さあらはして、主計之助を助けしは、近江源氏に隠れなき佐々木左衛門高綱ならん、二人の軍師揃ふ上は、最早安堵の加藤氏、我察祝仕るさ、始終を計る名將の、詞は鐵石後橋、實に大國の主なり。正清きつこ空打眺め詞アレくく光りを失ふ將星の、今迄地下に落ちさるば、北辰尊星感應あり、百日の満類に、佐々木兒島の兩大將、味方

に加へし今月今日、アラ悦ばしやこいふ息さしも心のたるみ、忽ち變る其面色、見るに葉水か又惻り、扱ば嚙に違ひなき、お身の惱みか悲しやさ、すがり歎けば、ヤアおろかく詞時政おたくみは知りながら、否まば違勅におささん方便、元より命ば天にあり、さばいひなむらお通のかた、斯なる果は御存じなく、歸國の砌り幼君を、われに抱かせくれんも、お頼みありしその時は、勿体なしともいたばしとも、百萬軍の強敵を、掴み挫きし正清が、五体をつらぬき、肉を裂くより辛苦かりし、其心を休めんさ、百日の今日まで、胸

を苦しめ身を苦しめ、祈りくし甲

斐あつて、念願届きし我身体、此の

樓にさやむべし詞三左衛門の落命

も、時節さあきらめ榭殿、葉末も

共にさまをかへ、都の悴も先途を見

よ、さるにても嫁籠絹、さぞや悴を

待ちわびて、くさ葉の影を行きなや

み、迷はんこの不便やこ、百鍊の

明鏡を、照らすも如き兩眼に、血汐

をそやく計りなり。歎きをこめめ兒

島元兵衛、此上は葉末殿榭殿、此

政次が付添ふて、子息の安否を尋れ

し上、佐々木に牒じて治國の計策、

日本はおろか唐高麗、又向ふ奴ばら

みなごろし、幼君四海太平を、その

樓に安座して、見物あれよ加藤殿

ごつゝ立上れば、大内義弘詞ホーナ

勇しい兒島政次、しかし天運いたら

ずば、幼君の御供して、我本國へ來

られよこ、残す詞は義弘が、妻ご妻

へも末々を、いさめて直ぐに歸國の

船路、女心の二人連れ、こなたも法

の蓮葉に、至らせ給へ南無妙法蓮華

經南無妙法蓮華經、唱ふる功德

は先の世に、頓てぞめぐり愛別離苦

會者定離さは聞ながら、歸らぬ事を

くりかへし、おさらばの聲ばかり、

後に名こりは升むたを、出づる本城

外曲輪、注進引はえし樓に、端座合

掌古今の英雄、見上る空に星象光、

照らす威徳ぞありかたき。



中  
双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段

八幡里引窓の窓

中 豊竹和泉太夫  
竹本貴鳳太夫  
鶴澤團之助  
豊竹古靱太夫  
切 鶴澤清太夫

人形

南方十次兵衛 吉田榮三  
女房お早 吉田文五郎  
與兵衛母親 吉田小兵吉  
平塚丹平 吉田文作  
三原傳造 吉田光之助  
濡髪長五郎 吉田玉松

この淨瑠璃は近松翁の「壽の門松」  
と西澤一風、田中千柳の「昔米萬石  
通」を併せて脚色されたもので寛  
延二年七月竹本座も初演であります  
作者は竹田出雲、三好松洛、並木千  
柳の合作、この「引窓」は八冊目に  
なつてゐます。この段の内容を申し  
あげますと、人殺しをしてお尋ね者  
となつた相摸取の濡髪長五郎はせめ  
て一眼母親に會ひたいと八幡村へ落  
ちてゐたが、其家は南與兵衛さて  
今は侍に取立てられて南方十次兵  
衛と名乗る家、與兵衛の義理の母お  
幸は長五郎の眞母であるので新に名

字帯刀を許された與兵衛は既に人相  
書まで廻つてゐるこの長五郎を召捕  
れば大手柄であるが、母の心も察し  
て繩打つこともならず暮れ六つ過ぎ  
れば與兵衛が役、女房お早も引窓を  
明けてまだ日が高いと言ふ、母と夫  
への氣の遣ひ、眼を閉ぢて長五郎を  
見遁してやる與兵衛の心、その義理  
立の温情を拜む母お幸が子への愛着  
は、長五郎の前髪を剃り落して人相  
を變へ河内へ落してやるさいふ義理  
人情の柵に縛られて人の世の相を  
巧みに描つた名作であります。すで  
に古靱太夫の語り物として有名なも  
ので御座ゐます。

(床本) 八幡里引窓の段

出入や月弓の八幡山崎南與兵衛のお  
祖母我子可愛かかれを出せさこ調ひ

しを思ひ合せば其昔八幡近在隠れなき郷代官の家筋も今は妻のみ生のこり神と佛を友にして秋の半の放生會よみや祭りと待宵さかけ荷ふたるそなへもの、母は神棚しつらへば嫁は小さいを月代へ子種頼みのよれだんご月の數ほど持出るコレ嫁女月見の芋はあすの晚けふは待宵殊に日の内からは早い〜是はしたりお前があすの放生會をけふからおそなへ遊ばす故何んにもかも宵日からするこま〜チ、笑止コレ其チ、笑止はやつぱり廊の詞大阪の新町で都さいふた時こは違ふ今では南興兵衛が女房のお早近所の方がきたさたば吸付て出しやんなや今でこそ零落たれまへは南方十治兵衛さいふて人もうらやむ身体連れ合お果なされてから興兵

衛が放埒郷代官の役目もあがり内證も仕もつれこなたの手前も恥かしい事だらけ、さりなから此所の殿様もおかはりなされ新代官は皆あがり古代官の筋目をお尋ねにて興兵衛も俄のお召し昔にかへるは此時と雜行なれども神いさめの供へもの蚤の息が天まやらお上の首尾が聞きたいのイヤモウそれはお氣遣遊ばすなおまへの其お心も通じて御出世でござりまして早ふ吉左右聞けましたやご待兼見やる表の方編笠にて顔かくし世を忍ぶ身の後や先見廻し立寄る門の口嬉しや爰じやとすつさ入る母は見るよりヤア長五郎が母者人濡髪様か都殿長はしたり扱は願ひの通り興兵衛殿と夫婦に成つてかマア悦んで下さんせ、わしを請出した権九郎は根

が獨逸仕で牢へ入る殺されたたいこ持は盗人のうけまへ取りで追劔に成つて殺し徳何んの氣がわりなう添つて居やんすハテ仕合せな事同じ人を殺しても運のよいのこ悪いのこハテ仕合せな事じやのイヤコレおばやしみんくとした咄しじやがそなた衆は近付かアイ曲輪でのお近か付あの興兵衛もかイヤははつゝあ一ト目知る人じやが又長五郎様がお前を母様さおつしやる譯は〜チ、ふしぎなは道理〜ごふで一度はいはねばならぬこの長五郎は五つの時養子にやつてわしは此家へ嫁入興兵衛は先妻の子でわしとばなさぬ仲故に其譯しつても知らぬ顔あそこや爰の手前を思ひかつふつ首信もせなんだが去年開帳参りにふさ大阪で見付年たけてもてい

本の邊を御詮議なされ夜に入らば拙者が請け取替相摸取でござらふがやはら取でござらふが見付次第に纏ぶつてお渡し申さん其段そつ共ヤレ其詞を聞いて安堵いざ丹平殿捕葉邊へ參ふか、いか様日の内は随分我々勤夜に入ってお頼み申す肝心早お暇然らば又晩程役所にて御意得ませう左様くご目禮し二人の武士は立歸るおはやは始終もの案じさしうつむいてゐたりしが申與兵衛様あちな事を頼まれなされ長五郎さやらを捕つて出そこの請合はそりやマアおまへほんの氣かへハテけふさい物の言様あの侍に由縁もなく元よりの長五郎に遺越もなけれど今の兩人が願ひによつてお上より此與兵衛に仰付けられた其仔細はア、彼の關口流

の一手も覺ある事お聞及び有てやナニ役人共に申付ける筈なれ共當所へ來て間もなく不案内住馴た其方に申付ける日の中はあの方よく詮議せん夜に入ては此方よりすみく迄詮議し何卒搦捕で渡せ國の譽そ有てのお頼みイヤモ一生の外聞召捕て手柄の程を見せたらば母人にも嘸お悦びイエくく何のそれがお嬉しからふぞ。なせ。ハテ昔はとも有れきのふけふ迄は八幡の町の町人生兵法大疵の基さひよつこおけりでもなされた時はお袋様の悲しみ何のお悦びでござんせふイヤいらざる女の差出。わりや手柄の先をおるかハテ折も一つはお前の爲、ヤアこいつお、何で濡髪をかび立て但しは儕か一門か何にもせよ御前で請合見出しに合た此

與兵衛今迄さば違ふ詞かへさば手は見せぬさきつげ廻せばヤレ夫婦の争ひ必無用と母は一間を立出最前からの様子残らずあれにて聞きました、何んぞ其濡髪の長五郎さいふ者そなたよふ見知つてかサレバ一度堀江の相摸で見受其後色里にてちよつこの出合イヤモ隠れもない大前髪たしか右の高頬にはぐる見知らぬ者も有ふこ有つて村々へ配る人相書コレ御覽なされ懐中より出して見せたる姿繪をぞれさ見る母二階より覗く長五郎手水鉢水に姿が寫るこ知す目早き與兵衛が水鏡きつこ見付けて見上るをささきおはやが引窓がしやり内は眞夜さなりにけるこりや何さする女房ハテ雨もぼろつく最早日の暮灯をさもして上ませふムウハテナはてな



あ面白く日暮れば與兵衛が  
 役忍びお尋者イテ召捕んとすつ  
 くさ立ちそれまだ日も高いと引窓ぐ  
 はらり明て言れぬ女房の心づかひぞ  
 せつなけれ母は手箱に嗜し銀一包  
 取出し是はコレ御坊へ差上永代經を  
 よんでもらひ未來を助からうふと思  
 ふ大切な銀なれ共手放す心を推量し  
 て何ぞ其繪姿わしに賣てたもらぬか  
 ムウ母者人二十年以前に御實子を大  
 阪へ養子に遣はされたと聞たが何ぞ  
 其御子息は今に堅固でござるかな與  
 兵衛村々へ渡す其繪姿ごふぞ買たい  
 ハア、鳥の粟をひらふ様に溜置かれ  
 た其銀佛へ上る布施物を費しても此  
 繪姿がお買なされたいか未來はなら  
 くへ沈むとも今の思ひにはかへられ  
 めわいのハアぜひもなやま大小投出

し兩腰させば十次兵衛丸こしなれば  
 今迄の通りの與兵衛相かはらず八幡  
 の町人商人の代物お望ならばへへ上  
 げませふわいの賣て下さるかそれ  
 ではこなたのアイヤ申し日の中は私  
 が役目ではござりませぬハア、忝け  
 なやさいたいく母袖はかほかぬ涙の  
 海嫁は見る眼を押し拭ひイヤ申し與兵  
 衛様あんまり母御様のお心根がいた  
 はしさに大事の手柄を支へました嘸  
 憎いやつ不届者さお呵も有ふ産の  
 子よりも大切にかわいがつて下さる  
 御恩せめてはお力に乞俱々に隠しま  
 した常々からも萬事の品包むと思ふ  
 て下さんすなご中に立身のせつなさ  
 を言譯涙に時移り哀れ敷添ふ暮の鐘  
 くまなき月も待宵の光り移ればや夜  
 に入れば村々を詮議する我役目ア、

河内へ越る拔道は狐川を左りに取右  
 へ渡つて山越にへアよもや夫へは  
 行くまいとそれぞ知してかけ出る情  
 も厚き藪だ、み折から月の雲隠れ忍  
 びて様子を窺ひ居るこたへ兼たる長  
 五郎二階より飛で降り表をさしてか  
 け出すを母は抱き留めヤイうるたへ  
 者ごこへゆくイヤ最前より尋常に繩  
 かいらふも存じたれ共あんまりと申  
 せばお志の有がたさ眼前歎きを見  
 せませふよりは此家を離れてこそこ  
 たへにこたへておりましたが與兵衛  
 殿の手前もあり後よりぼつ付きさら  
 れる覺悟御赦されてさかけ出すをこ  
 つて引すへヤイ爰なものしらすめお  
 れ斗りか嫁の志與兵衛の情迄無に  
 しおるか罰あたりめなきぬ仲の心を  
 疑ひ繪姿を買ばふと言ひかけたは見

遁してたもるかたもらぬかご胸の内  
を聞ふ爲、賣つてくれた其時の嬉し  
さおりや〜後影拜んだ〜はやい  
まだ其上に河内へ越る抜道迄おしへ  
てくれた大恩をおのれや〜何ぞ報  
ぜうと思ひ居るぞいやいコリヤヤイ  
死る斗りが男ではないぞよ七十ちか  
い親持て喧嘩口論人を難す言ふ様  
な不孝な子が世に有ふかくるご其儘  
かけ腕に一膳盛と望んだはおのりや  
〜牢へイヤサ牢へ入覺悟じやな、  
それかごふ見てゐられふぞんくせめ  
て親への孝行に逼れるだけは逼れて  
くれコリヤ生られるだけは生きてたも  
何の因果で科人になつた事じやご

うご伏前後不かく泣叫ぶおはやも  
俱にせきのぼす涙おさへて申〜泣  
てござる所じやないぞ〜夜が明くれ  
ば放生會で人立が多い今宵の内に落  
す思案ごふぞ妾をかへる仕様は有ま  
いかなチ、其れも心付いて置ました  
まあ目に立つこの大前髪剃落しまし  
よドレ剃刀アイヤ申母人妾をかへ  
て繩かゝらばよく〜命をおしさに  
ご言れるも無念な侍を殺した場で  
直ぐに相果ふぞ存じましたお死れぬ  
義理にて生なむらへ一日〜ご親の  
事が身にしみま一度お顔が拜みたさ  
にお暇乞に參つて返つて思ひをかけ  
まするはいアイヤ〜やばり此儘

で與兵衛殿へお渡しなされて下さり  
ませム〜スリヤごふ言ふても繩かゝ  
る氣じやな覺悟致しておりますよ  
いは勝手にしをれわれより先にご刺  
刀をア申母者人あぶない〜誤りま  
した〜サアそんなら剃て落し  
てくれご母が手づから合せ砥にかゝ  
る思ひの有ふさは神ならぬ身のしら  
ごの此身剃べき髪は刺もせて祝ふて  
落す前髪を涙でもんで剃落す老の拳  
の定まらずわな〜震ふて又先がき  
つくりア〜申二た所迄お顔に疵がア  
〜ひよんなしました幸ひ血留と硯の  
墨べつたり付けて顔打なごめ大かた  
これで人相がかけつたご肝心の見知

は高頼のほぐる剃落さん、剃刀をあて事はあてながら是こそばてゝこの譲り篋と思へば嫁女わしはごふも剃りにくいこなた頼む剃落して下され私じや違むごたらしうそれがごぶ剃らるゝ物、是斗りはお赦しなされて下さりませ〜ア、思へば〜親の篋まで剃落す様になつたかエ、心からさば言いなむらかはいの者やご取付てわつご斗りに泣沈む折もこそ有れ門口より濡髪取つたご打付る銀の手裏劔高頼にびつしやりはつご身がまへ母はたておはやは灯立覆ひ今のは慥連合の聲長五郎様顔のほぐるが潰れたぞへヤアほんに眞に是も情け

ご母親は表を拜みあたりしご兼て覺悟の長五郎思ひ設けてごつかご座しサア母者人お前のお手で繩をかけ與兵衛殿へお渡しなされて下さりませコレ長五郎様お前は氣がのぼつたかごつたご顔へ打付てほぐるを消した連合の心又この打付た銀の包に路銀ご書た一筆そこにお心付ぬかへイヤ其書付もほぐるを消した心も骨にこたへ肝に通りあんまり過分、忝なさに母の歎きも御意見も不孝の罪も思はれずかたわなご可愛いごぎりも法も辨へなく助けたい〜ご母人の御慈悲心暫くはお心休めご詞に隨ひ元腹迄致したれ共一人ならず二人な

らず四人迄殺した料人ア、助かる筋はござりませぬ、なまかな者の手にかゝらふより篋ご思ひ母者人泣かず共繩をかけ與兵衛殿へ手渡ししてよふお禮をおつしやれやヤコレなふてはこなた未來の十次兵衛殿へ立ちますまいごのア、誤つた長五郎よふいふてくれたないかさま思へばわたしは大きな義理しらす誠をいばい、我子を捨ても繼子に手柄さするご人間畜生の皮がぶり猫が子をくわへあるくやうに隠しごげふごしたは何事、ごても遁れぬ天の綱一世の縁のしげり繩おはや其ほそ引でも取て下されイヤそれでは連合の心を無になさるゝ

と申もの唐天笠へござつても此世に  
さへござればごふしてなりとも又あ  
はれる何かばなしに落しまして下さ  
んせ〜イヤのふ。一旦かばふたは  
恩愛今又繩かけ渡すのはなきね中の  
義理晝はかばひ夜は繩かけ晝夜に分  
る織子本の子慈悲も立て義理も立つ  
くさばのかげの親々への言譯覺悟は  
よいか、待兼ておりまするごおはや  
を取て突退〜手を廻すれば母親は  
幸ひ有あふ窓の繩追取て小手縛り突  
放せば引繩に窓はふさわれ心は聞く  
らき思ひの聲はり上げ濡髪長五郎を  
召捕たぞ十次兵衛は居やらぬか請取  
て手柄に召されと呼聲に與兵衛はか  
け入お手柄〜左様なふては叶はぬ  
ごころごとも遁れぬ科人請取て御前  
へ引女房ごもも何時されば夜半に  
なりませふかヤアたわけ者めが七ツ  
半を最前聞た時刻かのびるご役目が  
あがる繩先き知ぬ窓の引繩三尺残し  
て切るが古例目ぶ入りやうに是から  
ごすらりと抜いて縛繩すつかり切は  
ぐばら〜指込む月に南無三寶  
夜も明た身共が役は夜の内斗り明く  
れば則ち放生會生を放す所の法恩に  
きず共勝手におひきやれハハはつご  
悦ぶ嫁姑あはす兩手のかすよりも九  
ツの鐘、六ツ聞いて残る三ツは母へ  
の進上拙者が命も御自分へそれも言  
はずごさらば〜さらば〜の暇乞  
別れてこそは落て行く

と申もの唐天笠へござつても此世に  
さへござればごふしてなりとも又あ  
はれる何かばなしに落しまして下さ  
んせ〜イヤのふ。一旦かばふたは  
恩愛今又繩かけ渡すのはなきね中の  
義理晝はかばひ夜は繩かけ晝夜に分  
る織子本の子慈悲も立て義理も立つ  
くさばのかげの親々への言譯覺悟は  
よいか、待兼ておりまするごおはや  
を取て突退〜手を廻すれば母親は  
幸ひ有あふ窓の繩追取て小手縛り突  
放せば引繩に窓はふさわれ心は聞く  
らき思ひの聲はり上げ濡髪長五郎を  
召捕たぞ十次兵衛は居やらぬか請取  
て手柄に召されと呼聲に與兵衛はか  
け入お手柄〜左様なふては叶はぬ  
ごころごとも遁れぬ科人請取て御前  
へ引女房ごもも何時されば夜半に  
なりませふかヤアたわけ者めが七ツ  
半を最前聞た時刻かのびるご役目が  
あがる繩先き知ぬ窓の引繩三尺残し  
て切るが古例目ぶ入りやうに是から  
ごすらりと抜いて縛繩すつかり切は  
ぐばら〜指込む月に南無三寶  
夜も明た身共が役は夜の内斗り明く  
れば則ち放生會生を放す所の法恩に  
きず共勝手におひきやれハハはつご  
悦ぶ嫁姑あはす兩手のかすよりも九  
ツの鐘、六ツ聞いて残る三ツは母へ  
の進上拙者が命も御自分へそれも言



### 次 三十三所壺坂寺

#### 澤市内の段

#### 澤市内の段

切

レツ

竹本 鍛太夫  
豊澤 新左衛門  
鶴澤 友衛門  
鶴澤 寛市

人形

座頭 澤市 桐竹 政龜  
女房 お里 吉田 文五郎  
観世音 桐竹 紋太郎

西國六番の札所大和國壺坂寺觀世音の靈驗を記した名人團平が妻女加古千賀女の筆になり、名人團平が一代の蘆菔を傾注して節付した名作であります。内容は澤市といふ座頭の女房お里の貞節を叙したものであります。壺坂寺の片ほそりに住む澤市といふ座頭は三つ違ひの美しいお里といふ女房を持つてゐたが、三年このかた毎夜のやうに家を抜け出して往くので澤市は隠し男があるやうに嫉妬します。眞はお里は毎夜夜中に壺坂の觀音様へ參り夫の眼病平癒を祈つてゐたものでした。それを解つた澤市は女房の貞節に泣いて厚い心に

謝しましたが所詮は癒らぬ眼病にいつ迄厄介かけるも壺坂寺の谷へ身を投げますとかけつけたお里も夫の後を追ふて、つやいて身を投げますその信心の厚さ女房お里の貞節に觀音の利益をたまひ、身は助かり澤市の眼があくといふ夫婦愛を高唱した絶好の世話もので御座ります。

#### (床本) 澤市内の段

夢が浮世か浮世が夢か夢てふ里に住ながら住ば住なる世の中によしあしびきの大和路や壺坂の片邊り土佐町に澤市といふ座頭あり生れ付たる正直の琴の稽古や三味線の糸より細き身代の薄き煙りの管みに妻のお里は健やかに夫の手助け賃仕事つれさせてふ洗濯や糊かきものを打盤の音も幽のくらしなり鳥の聲鐘の音さへ

身にしみて思ひ出す程涙が先へ落てなぐる、妹脊の川をチ、是はく澤市様けふは何ぞ思ふてやら三味線出してよい機嫌じやのホー、チ、お里かそなたアノおれが三味線彈をよい機嫌に見ゆるかやアイナアハテナアおりやそんな氣じやないわいのモウくく、氣が詰つてくくいつそ死でものけふエーイヤサアノ死んで仕廻程氣がふさいでならぬわいのふイヤコレお里わしやそなたにチト尋ねた事がある。マアく下に居やくくハテ扱下に居やいのふ外の事でもないがいつぞは聞ふく思ふて居たが丁ど幸ひ光陰矢の如しきやら月日の立はま、早いものなアソレわがみぞおれがコウ一所に成てからモウ三年稚い時より許嫁互に心も知つて居

るにマなげ其様に隠しやるぞきつぱりぞ打明て言てたもど何處やる濁る詞のはしお里は更に合點行かすふしんながらにコレ澤市様そりやお前何を言しやんす嫁入してから三歳のあいだモほんにく露程も隠し立した事はごさんせぬが夫共に何ぞ又お氣にいらぬ事有げ言て聞して下さんせサそれお夫婦ぢやないかいなム、そふ言やればこつちも言はふチ、何成共言しやんせチ、言はいでかコリヤお里マよふ聞けよわれと夫婦になつて丸三年毎晩七つから先寢所へ手をやつても終に一度も居た事かないソリアもうおれは此様な盲珠にゑらい疱瘡でモ見る影もない顔形どふで我の氣に入ぬば無理ならねど外に思ふ男が有らばさつぱりぞ打明て言ふ

てくれたら此様に何の腹を立ふぞい尤もわれぞおれは従弟同士専ら人の噂にもアノお里は美しいくこモ聞度事におれはもふよふ諦めて居る程に愴氣は決してせぬぞやコレどふぞ明して言てたもど立派に言へど目にもる、涙吞込盲目の心の内ぞせつなければ聞にお里は身も世もあられず續り付てエ、ソリヤ胴怒な澤市様いかに賤しい私じやさて現在お前を振り捨て、外に男を持つ様なそんな女ぞ思ふてかソリヤ聞へませぬくエ、聞へませぬわいなもこ、様や母様に別れてから伯父様のお世話になりお前も一所に育てられ三つちがいの兄さんさいふてくらして居る内に情なやこなさんば生れも付ぬ疱瘡で目かいの見へぬ其上に貧苦にせまれど

何のその一旦殿御の澤市様たごへ火の中水の底未來迄も夫婦じやと思ふ計かコレ申お前のお目を治さん此壺坂の観音さまへ明けの七つに鐘を聞きそつと拔出で只一人山路いさはず三年越せつなる願ひに御利生のなはいさはいか成報ひぞや観音様も聞へませぬさ今もいままで恨んで居たわしの心もしらずして外の男も有る様に今のお前の一言が私はばらが立ちいのさくごき立たる貞節の色ぞ誠也始て聞き妻の誠今更何と澤市も言はぬ堪忍してたも誤つた

何の詫お前の疑ひ晴たれば私しや死んでも本望じやわいな〜イヤモウそふ言てたも程わがみの手前面目ないわいのふが夫程に迄信心してたもつてもおれが此眼はコレマ治りはせぬかいのエイソリヤマア何を言はしやんすぞいな此年月のうき艱難雨の夜雪の夜霜の夜もいさばぬ私わはだし参りも皆お前の爲じやぞヘサア夫程に祈誓をかけ願ふてたもつた志有がたい共嬉しい共其貞節なそなたをば此年月の廻り根性観音様じやこいふたさて罰こそあたれ何のママ此目が明いてたまるものか、エ、何のいな私の中からだばコレイナアコレお前の體も同じ事そんな愚痴を言ふよりちやつと心を取なをし観音様へ俱々にお願い申し下さんせ〜と夫を

思ふ貞心の心づかひぞ哀なり。澤市涙にくれながらチ、過分なぞや女房共そふそなたが一心のすばつた上は御佛の枯たる木にも花がさくさやら見へぬ此目ばかれたる木ア、ごふぞ花が咲きたいなさいふた所が罰の深い此身の上せめて未來をイヤサアノ女房共手を引てたもいざ〜さいふに嬉しく女房が身拵さへそ〜にいたわり渡す細杖の細き心もほそからぬ誓ひはふかき壺坂の御寺をさしてMたどり行傳へ聞く壺坂の觀世音は人皇五十大桓武天皇奈具の都にまします時御眼病甚しく此壺坂の尊像へ時の方大道喜上人一百七日の御祈禱にて忽ち平癒有らせられ今に至つて西國の六番の札所さば皆人々の知る所實に有難き靈地なり折しも

くわいのふモウそふさばしらすかたわの癖に愚痴計りコレこらへてたもれさ斗にて手を合したる詫涙袖や秋をひたすらんアコレ連添女房に







どうぞ早ふ眼の明きます様お助けなされて  
 下されし祈らぬ間違もないものをけふに限  
 つてこのしだら後に残つて私しやまあごふ  
 なるぞいな、アごふせふぞいなくく  
 くア、是を思へば最前に諷はしやしんし  
 たアノ歌はごふやら心にかゝつたが今で思  
 へば其時に死る覺悟で有たのかエしらな  
 んだくくくわいな斯言ふ事なら何のマア  
 お前を無理に連れて來ませふ堪忍して下さ  
 んせくくくほんに思へば此身程はりない  
 ものが有かいな二世を契りし我夫に長いわ  
 かれさなる事は神ならぬ身の淺ましやか  
 る憂目は前の世の報ひか罪かエ、情なや此  
 世も見へぬ盲目のやみより闇の死出のたび  
 誰か手引を仕てくれ迷はしやるのを見る  
 様でいさしいわいのさかきくごきくごき立  
 くく歎く涙は壺坂の谷間の水や増るらん。  
 漸々涙の顔を上げまゝ悔むまい歎くまい皆

何事も前の世の定り事と諦めて夫と俱に死  
 出の旅マ思へはかたみの此杖を渡すは此世  
 を去てゆく行先導き賜へや南無阿彌陀佛み  
 だ佛の聲諸共に谷間へ落てはかなき身の最  
 期貞女の程こそ哀れなり。頃ば二月中ぞら  
 や早や明け近き雲間よりさつと輝く光明に  
 速て聞ゆる音楽の音も妙なる其中にいさも  
 け高き上臈の姿を假に觀世音微妙の御聲う  
 るはしくいかに澤市承ばれ汝前生の業に  
 より盲目さなつたりしかも兩人ながら今日  
 にせまる命なれ共妻の貞心又は日頃念する  
 功德にて壽命を延し與ふべし、此上はいよ  
 く信心渴仰して三十三所を順禮なし佛恩  
 報謝なし奉れコリヤお里く澤市くくご  
 宣ふ御聲諸共にかき消す如く失賜へば早や  
 長朝の鐘の聲四方にひびきて明け行く空ほ  
 のくくくらき谷間には夢さも分かぬ二人こ  
 もむつくさ起てヤアこなたは澤市様アッコ

お電話御用は

南  
 5番・701番・711番  
 (長) 132番・5291番  
 西630番



新秋づま

南一温泉料理

獨特の温泉で爽快な気分を  
 善美な湯宿に盡一を

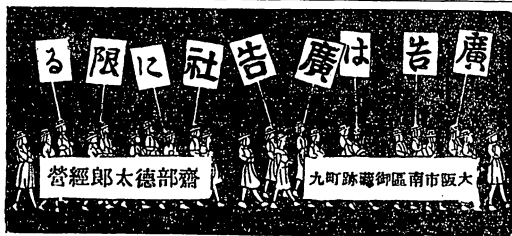
のまसानみ  
 南一温泉料理

四ツ橋

レこちの人お前の眼も明いて有るなエーア  
ノほんにコリヤ眼が明いて有るチー眼が明  
た〜〜〜眼が明たチエー観  
音様のおかげ有難ふござります〜〜  
アごなたじやへごなたごは何ぞいのコレ私  
はお前の女房じやはいなエーアノお前がわ  
しの女房かへコレハシタリ始めてお目にか  
ゝりますア、嬉しや〜夫に付てもふしぎ  
な事まさしくわしは谷へ落ち死だと思ふて  
何にも知らぬ其内に観音様がお出なされ前  
生の事細々ご御しらせサイナア私もお前の  
後を追谷へ落たに違はないも身内に一つも  
疵付かず其上お前のお眼は明ホコリヤマア  
夢ではないかいなムーそんなら今澤市〜  
さおつしやつたごコリヤ観音様も直々にお  
呼び生け下さいましたに違ひはないハ〜ハ  
ア有がたや忝けなや是より直にお禮参り

は浮木の龜始めて拜む日の光りは年立かへ  
る心地ぞや是ぞ誠に観音の御利生有りける  
や、見へぬ眼も見へ明らかに有がたかりけ  
る新玉の年立歸る如くにて水も洩さぬ夫婦  
の命も助かりけるは誠に目出度うさふらひ  
けるけふは嬉しや杖を納めて折しも朝の日  
の目を拜んでお禮申すや神や佛萬見せ賜ふ  
は是偏に観音世これ偏に觀世音の誓の重き  
は岩を建水をた〜へて壺坂の庭のいさごも  
淨士なるらん御しめし有難かりける御法な  
り。

現代的



電話戒三七五六番



新口村の段

親孫右衛門 役毎	竹本相生太夫	忠兵衛 日替	豊竹島太夫	梅川	竹本南部太夫	忠三女房	豊竹富太夫	豊竹綾太夫	豊竹千駒太夫	竹本長子太夫	野澤吉彌	龜屋忠兵衛	吉田扇太郎	傾城梅川	桐竹政龜	忠三女房	桐竹瓢壽呂	樋口水右衛門	吉田紋太七郎	傳口水右衛門	吉田玉七	置掛頭巾	吉田傳之助	鶴掛藤兵衛	吉田市松	捕手 孫右衛門	吉田玉次郎
----------	--------	--------	-------	----	--------	------	-------	-------	--------	--------	------	-------	-------	------	------	------	-------	--------	--------	--------	------	------	-------	-------	------	---------	-------

人形

切戀飛脚大和往來

新口村の段

近松興林子の『冥途の飛脚』を菅專助、若竹笛朝が改作したのがこの『戀飛脚大和往來』で初演は安永二年十二月で堀江豊竹座。浪華淡路町の飛脚屋渡世の龜屋忠兵衛はふとしたことから新町の遊女槌屋の梅川に馴染み忠兵衛はそつこん梅川に打込んで金に窮した揚句さる大名の廻送金の封印切をした籠で大罪人となつたので梅川さ手に手を取つて駆落し新口村の孫右衛門に暇乞をなし死場所を求めに行くといふのがこの段で御座ゐます。

(床本) 新口村の段

詞節季候だい、だい、だいは節季

候、おめでたいは節季候。通らしやれ、親方衆と違ふて、こちさらは水呑百姓、こなた衆にやる米はないわいのこ。つごに云はれ、詞こりやひどい、如何様貰ふ節季候より内の様子はせく候と、去れば女房は糸ぐるま、正月迄は休まうと、納戸へ取込みおうへの塵、掃出す表へ詞てい古手買紙屑、お内儀様紙屑はないかな、オ、いやな人ぢやわいの京や大阪と違ふて、在所に紙屑はない物ぢや、勝手しらのぬ人ぢやそうない町へ出て買わつしやれ、阿呆な人さ笑はれて、つぶやきながら見過し、く、歸る程なく同行二人、ぶだらくや岸打波は三熊野の、那智のおやまの詮議さば、人目にそれと白木綿禪衣かけて順禮姿、お嬢様、火を一

つ借つしやりませ、處は何さいふ所かな。  
 爰は大和の新口村、煙草の火は出しませぬ  
 手の内も法度でござんす、ア、けんごな在  
 所だなと、家内をきよろ／＼め廻し、次  
 の村へこ出て行く、詞ほんに今日程うさん  
 らしい者のたんこくる日はない、納戸這入  
 りも成るまい、ドリヤ夕飯のこしらへこ、  
 籠の前に差かゝる。落人の爲かや今は冬か  
 れて、すゝき尾花はなけれ共、世を忍ぶ身  
 の後や前、人目を包む頬かぶり、隠せご色  
 香梅川が、馴ぬ旅路を忠兵衛が、痛がる身  
 さへ雪風に、凍える手先懐に、あた／＼め  
 られつ瀧めつ、石原道を足曳の、大和は爰  
 ら古郷の、新口村に着きけるが、詞コレ爰  
 は、わしが生れの在所、四五丁行けば實の親  
 孫右衛門殿の所なれど、不通さいひ織母な  
 り、殊に今の身の上を、お目にかけるは大  
 きな不孝、此わらぶきは忠三郎さいふて、

親達の家來も同然、マア／＼爰へこ門の口  
 詞 忠三郎殿内にか、ア、久しう達ませぬと  
 つゝこ這入れば女房は、詞ア、こちのは今  
 庄屋殿へ、どこからござんして何の用、わ  
 しや戴際の次郎兵衛後家の媒酌で、近い頃  
 爰へ来た故、前方の近付は知りませぬが、  
 もし大阪の衆ぢやないかいな、こちらの親方  
 孫右衛門様の息子殿、大阪へ養子に行つて  
 けいせいこやらいふ物を澤山買ふて、人の  
 金を盗み、其の傾城を手にさげて、走つた  
 こやらすべつたこやらで、代官所からきつ  
 い詮議、孫右衛門様は久離切つて、お上の  
 構ひなれど、血を分けた親子なれば、  
 いさしや年寄つてきつい案じ、こちの人も  
 馴染故、もしこのあたりうるたへて、見付  
 けられはさしやれぬか、いかい氣苦勞、  
 庄屋殿から呼には來る、ヤ寄合ぢや印判ぢ  
 や、節季師走に爰らあたりは、傾せい事

は座中の月九  
 伎舞歌大京東

・日初日二月九・  
 幕開時四後午日每

一の谷嫩軍記 二幕

双面水照月 常磐津  
 連中

河竹默阿彌作  
 極附幡隨長兵衛 三幕

吉右衛門  
 友右衛門  
 宗十郎

其他  
 花形捕

でにえかへる、ア、うたての傾せいやこしられた遠慮もなかりけり。二人はハツと駒に釘、打點頭て成程々々、詞大阪でも其の評判、わしらは女夫づれで、年籠の参宮、懐かしさに寄りましたが、立ながらあふて行にたい、大阪者と云はずに、ちよつと呼んで来て下されぬか。オ、夫は安い事、一かへり行つてきませうか。京のお寺も鎌田村の道場へお下り、先からすぐに参られたもしままい、夫ではよつぼざわしが戻りも遅い、コレ女中様、飯がしかけて有る程に、出来損なはぬ様に、差くべて下さんせやと尋外して出て行く。後は門口はたこしめ、鑿金かけてうつまりさ、暫し詞もなかりしが、詞コレ忠兵衛様、ほんに爰は劍の中、斯うして居ても大事ないかへ。ア、いやしく、男氣な忠三郎、頼んで今夜は爰に泊り、死ぬる共故郷の土、生の母の墓所、い

つしよにうづまれそなたにも、嫁姑を引合せ、未来の對面さしたいと、おろく涙梅川も、それは嬉しうござんせう。去ながら、私ごと、様か、様は、京の六條珠數屋町、定めて此間詮議に合ふて居さんせう、か、様は眩暈持、若もの事は有るまいかと、我身のうへより案ぜられ、今一度京の両親に、一目あふて死たうござんす。詞オ、道理ぢや、わしもそなたの親達に、聳ちやさいふて逢もしたし、恩の有る養子親、妙閉様や言號の、おすはへも不埒の詫、そなたの兄忠兵衛殿の、志も無にした斷り今一度しみるあひたいと、人目なければなきじやくる。わたしもたんご恩の有る、兄さんも猶戀しいと、互ひに手を取り抱き合ひ、涙のあらはらぐと、袖にあまつて窓を打つ、詞ハア雪が降さうなと、奥の間は西受の、反古障子を細目に明け、見

～座花浪の月九

の得見目お初出逢

劇庭家新更

るす散放をトツイミアモーユ  
・・・いばしおいる明の月今

・日初日一月九

座花浪

・毎日晝夜二回開演  
・正午と五時卅分

ゆる野風の鳥道。うしろしぶきの雪吹にはかたけて急ぐ阿彌陀傘、道場参りぞつゝ、きける、詞ヤレありや皆在所の知つた衆、先なほ樋の口の水右衛門、ひざい呑人ぢやぞい、其次は荷持瘤の傳ひ姿、こりや又村一番の茶飲ぢや、そこへ入来る置頭巾は大貧乏であつたが。年貢に詰つて娘を京の島原へ賣つて、よい客に請出され、金持の奥様に成つて、賀の蔭で田も五丁、藏も二ヶ所の俄分限、同じ女郎受出して、わしはそなたの親達に、憂目をかけるが、口惜いわいの。エ、愚痴な、モシそんな事云て下さんすなく、アノ親仁は弦かけの藤治兵衛八十八で一升の、飯を殘さぬ達者もの、今年ばてうご錢百ぢや、其後に仔細らしい坊主ば、鍼立の道庵、あいつが鍼で母者人を立殺した、思へば親の敵。アもうよいわいな、今腹たてゝの、何の役に立たぬ

事。ア、アレ、あそこへ見える親父様、此世のわかれ御暇乞、せめて餘所作らお顔なりと、拜まうと、はるく愛迄来た念願も叶ふたか、ア、有むたいくく、あゝ、あの親子は争そはれぬ、目元かかないな、ほんに親子は争そはれぬ、目元から鼻筋から、お前はよう似た事わいな。詞サア夫程よう似た親子が、詞さへも得かばさねば、何とした身の因果、詞ア、お年も寄り足元も弱つて、是が今生のおいさま乞でござりますと、手を合すれば梅川は、今お顔の見初の見納め、詞わたしは嫁でござんする、夫婦は今も知れぬ命、百年の御壽命すぎて後、未來に孝行いたしましよと口の内にて獨語、夫婦諸共手を合せ、兎かく涙にむせび居る。孫右衛門は老足の、休みく門を過ぎ、野口の溝の薄氷、すべるを留る高足駄、鼻緒は切れて横様に、どう

### 新秋九月の樂天

今日も満員明日も満員好人氣

田宮貞樂劇一派

中西大蛇劇の合同演出

獵奇のナセンス劇をひげに

と轉べば南無三と、忠兵衛もかけぞ出られぬ身、梅川あはて走り出で、抱起しつ襦袢り、詞申しくく、ごこもいたみは致しませぬかへ、お年寄のあぶない事、お足も洗ひはな緒もすけて上ませう、マアくこちへミ手を引いて、内へ伴ひ揚り口、腰膝撫でいたれば、孫右衛門は氣の毒さ、詞ア、戴きますく、ごなたか知らぬも忝ない、お蔭で怪我も致しませなんだ、ア、若い女中のおやさしい、年寄と思し召て、嫁子もならぬ御介抱、もうく手を洗はしやつてくだざりませ、幸ひ庭に藁は澤山、鼻緒はわしむすげますと、懐搜して取出す塵紙。ア申し、爰によい紙むござんす、小搓捻つて上ましょと、延べ紙引さん其手元不思議さうに打守り、詞此邊に見馴ぬ女中、マアこな様は、此様に、何誰なれば懇るにして下さりますと、顔つれくご眺む

れば、梅川いさ胸つぼらしく、詞ハイ私に旅の者、私の舅の親父様、丁度お前の年配で、恰好も生寫し、外の人にする奉公さは、さらくもつて存じませぬ、お年寄に舅御の、臥槽みのだきかへ、孝行は嫁の役、御用に立つて構しい物、詞無連合は飛立つ様にござりましよ、其紙さ此紙さかへて、私が申し請、連合の肌につけさせて、爺御に似た親父様の筐にさせたうござんすさ、塵紙袖におし包む、涙にそれさばしられけり。詞の端に孫右衛門、扱はさうかと思愛の、盡ぬ涙を押隠し、詞フウこなたの舅に、此親父が似たさいふこの孝行が、エ嬉しうござるが腹が立ちます、わしも年たけた伴めを、様子有つて久離切り、大阪へ養子にやつたが、傾城さいふ魔がさして、人の金を盗んだとやら、あげくに所を走つた噂、此大和は生國なれば、十七斬の飛脚

歐米映畫ニユ  
プリントの封切  
實演とレヴエー  
の本城

王映畫  
松竹座

・ごうさんぼり・

今日の流行  
明日の憧憬

あなたの松竹座  
をぜひ御覽下さい



屋仲間、お上からも隠し目付、或は順禮古  
 手買、節季候に迄身をやつし、此在所に詮  
 議最中、誰故なれば其傾城の嫁御故、近頃  
 愚痴な事なれど、世のたごへにもいふ通り  
 盗する子は憎うなうて、繩かける人も恨め  
 しいさば此事、詞久離切つた親子なれば、  
 よからうが悪からうが、構はぬ事ごは思へ  
 共、大阪へ養子に行つて、利發で器用で身  
 をもつて、身代もよう仕上げた、あの様な  
 子を勘當した、親は大きな白痴者ご、指差  
 せられ笑はれたら、其嬉しさはごう有う。  
 詞今にもつい捜し出され、繩かゝつて引る  
 時、孫右衛門は目水晶、よう勘當した出  
 かしたご、響られるのが悲しうござる、そ  
 れを思へば一日も、早う往生をおすくひご  
 拜願ふば今まゆる如來様、御開山、コレマ  
 佛に嘘がつかれうかと、ごうごひれ伏しも  
 だへ泣き、梅川も聲を上げ、忠兵衛は障子

より、手先を出し伏拜み、身をもみ歎くぞ  
 道理なる。猶も涙を拭ひ、詞様子聞いた  
 か聞かぬかしらぬが、子を釣出さうとお上  
 の計らひ、養ひ親の妙閑殿、一昨日牢に入  
 れたげな。エ、ご夫婦は氣もうろく、そ  
 れでつくく思ふには實の親を便にして、  
 もしも忍んで來はせまいか、來たらば何ぼ  
 う不便でも、養子親への義理有れば、かく  
 まふ事は扱置いて、親が繩かけ出さればな  
 らぬ、あゝごうぞ來てくれればよいが、爰  
 らあたりをまごつきはせまいかと、四年以  
 來逢もせず、なつかしい子の顔を、見ぬ様  
 にくご、雑行ながら神た、きも不便さか  
 ら、ア、ごはいふ物の、若死にするも人の  
 一生、義理有る親を牢へ入れ、おめくご  
 逃隠れば、末世末代不幸の悪名、所詮逃れ  
 ぬ命なら、一日なりご妙閑殿を、早う牢か  
 ら出すのが孝行、覺悟極めて名乗つて出い

新秋九月を彩る  
 潑瀾の大舞臺

角座の新聲劇  
 新聲劇の角座

四年振り新聲  
 劇四人組の顔を  
 合したるほか女  
 優其他凡ては更  
 新の氣溢る、今  
 日の新劇團を：

●●●九月一日初  
 ●●●正午と五時半  
 ●●●夜二回開演●●●

シタがそれもごうぞ、親の目にかゝらぬ所  
 で繩にかゝつてくれ、エ、現在血を分けた  
 子に、早う死れぬ教へるも浮世の義理か  
 非もなや、何故前方に内證で、斯うした傾  
 城に、斯うした譯で金も入るさ、便宜でも  
 しをつたら、久離切つても親子じや物、隠  
 居の田地を賣立ても、首繩はかけまいに、  
 皆あいつが心から、其の身もせまい苦し  
 をつて、いさしほなげに嫁御に迄、思ひも  
 寄らぬ憂目を見せ、知音近附親に迄、隠れ  
 る様に身を持ちなし、ろくな死もせぬ様  
 に、此親はうみ付けぬ、エ、憎いやつちや  
 さ思へども、かわゆうござるさ泣しづみ、  
 わけたる血筋ぞ哀なる。涙の隙に巾着より  
 金一包取出し、詞是は京の御本寺様へ、上  
 げやうと思ふた金なれど、嫁と思ふてやる  
 ではない、只今のお禮の爲め是を路銀にち  
 つまなま、遠い所へ往て下されさ、波せば

梅川押いたいき、詞お心付いた此お金、逆  
 様乍ら戴きます、大阪を立退ても、私か姿  
 目に立てば、借竹與に日を送り、奈良の旅  
 籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日  
 餘りに四拾兩、つかい果して二分残る、金  
 故大事の忠兵衛様、科人にしたも私から、  
 嗚憎からうお腹も立うが因果づくさ諦て  
 お赦しなされて下さりませ、親子は一世の  
 縁さやら、此世の別れにたつた一目、逢ふ  
 て進せて下さんせさ、奥の障子を明けるを  
 引留め、詞ア、コレ益体もない、たつ  
 た今もいふ通り、譬詞はかけさいでも、顔  
 見合したりや繩かけるか、おれが口から訴  
 人せにや、養ひ親への義理が立ぬ、何ぼ義  
 理が立たい由、親の手づからごう繩が、か  
 けられうぞいの、御尤でござりますす、  
 そんなら顔を見ぬ様にさ、傍に有合手拭取  
 り、泣々後に立迫り、慮外乍らさめんない

い易見ちついが畫映の待期御

座 天 辨

行興越引の座日朝

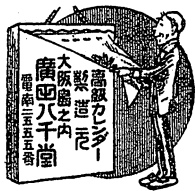
場切封の版新最マネキ竹松

千鳥、御不自由にはあらうが斯うさへすれば、傍にござつても構はあるまい。オ、オ、忝うござる、忝うござる、物云はずも顔見すこ、手先へなご障つたら、そちが本望達た心、親子一世の暇乞、必ずこなたの運合に、物いはして下さるなご、悦ぶ中に忠兵衛は、嬉しさ餘り馳出で、互に手と手を取かばせご、互に親共我子共、云はずいはれぬ世の義理は、涙湧出る水に、身を浮く計りに泣かこつ、折から聞ゆる多くの人音、二人を奥へさつきやり、詞コレ

女中、あの物音は誰に捕人、此裏道の小河を渡り藪をぬければ御所街道早う、ご氣をもむ所へ、順禮すむたの八右衛門、利平もともに蛋取眼、役人大勢打つれ立ち詞、此内がきぶさいなご、ごかく、ご込入る所へ、組子一人かけ来り、詞、所は長谷の山ついに、梅川忠兵衛ご名乗る者、休

みおつたを追つ取まき、からめさらんさいたせ共、中々手に合ひ申さずご、聞くより小頭扱こそ、来たれ續けご引かへせば二人も俱に飛んで行く。孫右衛門は飛び立つ嬉しさ、天の助けかたじけなご、裏道見やつて延あがり、詞、オ、さうぢやく、其道ぢや、ソレ其藪をくぐるなら、切株で足つくなご、届かね聲も子を思ふ、平沙の善知鳥血のなみだ、永き親子の別れには、安かたならでやすき氣も、涙々の三重、浮世なり。

各種印刷カレダン  
紙製品包装紙



・内之島・阪大・  
廣田八千堂  
電話二五五番

四ツ橋  
りよ

八月の文樂座  
消息日誌

△八月一日

年中行事夏の興行の初日開場

△八月二日

大阪府大阪市聯合後援の夏季音楽教育講習會の會員連も講習時間を割いて態々憧れの人形淨瑠璃氣分に浸られた。

△八月四日

大阪中央放送局吉例の舞臺中繼で「廿三間堂棟由來」平太郎住家の段を全國へ放送した。舞臺は前を南部、吉彌、後を島、友造人形は紋十郎のお柳、政龜の平太郎

玉七の藏人、玉幸の和田四郎で非常に好成绩を挙げた。

△八月五日

第四師團長林閣下始め幕僚五十餘氏が打揃つて來座された陸軍大異動に伴ふ送別の宴を兼ねて趣味深い觀賞會で凡ては徳永高級副官が幹旋の勞を執られた。深く感謝いたします。

△八月五日

福井常務をめぐる文樂座後援會が盛大に來觀三百餘名でいとも賑やかでありました。

△八月十二日

文樂通で鳴らしてある司法省の川崎次官が武田儀一代議士の東道役で新装後初の

化粧タイル

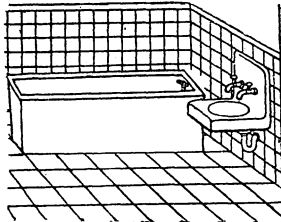
水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計

汚水浄化装置

特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目  
新橋

岡部商會

電話新町(六六九  
二二七六九

阪急夙川

岡部商會支店

電話西宮 一九七六

文樂見物をされた。川崎次官も文樂さ  
 深い因縁で東京への引越興行にはか  
 ず見物されその郷土香に陶醉されて  
 る。大阪人と淨瑠璃は離されぬもの  
 から大阪人はこれが保全のために大  
 見ればいかぬと熾んな文樂禮讚を  
 された。

△八月七日

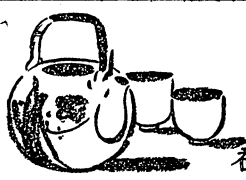
文樂と中等學生を結合した府の島田督  
 學課長が中等學生のマチネーに就て  
 〳〵考究中であつたが教護聯盟幹事連の  
 報告を待て來阪中の文部省督學官松井博  
 士を伴つて「寺子屋」を見物された。松  
 井博士は一段興味を惹かれたものと見  
 て切狂言まで見て歸られた程、急に文樂

愛好者になられた。島田課長の大英斷で  
 中等學生の文樂マチネーが實現される日も  
 さう遠くはないと思はれます。

△八月二十日

文樂の歴史に新しい記録を遺した夏の  
 興行（今年から年中行事になつた）の八  
 月興行も連日満員で打上げました。若手  
 連のために絶大の御聲援を齎はつた皆様  
 に厚く御禮申上ります。

（追記）二十一日から二十五日まで五日間  
 夏の興行を京都南座へ引越して京都フ  
 ンを喜ばせました。  
 津太夫、古朝太夫、綴太夫等一行にて夏の  
 東京劇場へ初出演して東京ファンを喜ば  
 せました。



大及御池橋  
 茶筌亭

電話新町二番

## 文樂座 使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ  
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス  
長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヨ  
但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス  
御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ滅失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス  
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任ゼマセヨ
- 十一、臺本檢閱並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

## 文 樂 座 使 用 料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)		夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)	
文 樂 座	約 850人	平日	80圓	100圓	160圓	
		土曜	80圓	110圓	170圓	
		日曜 祭	90圓	110圓	180圓	

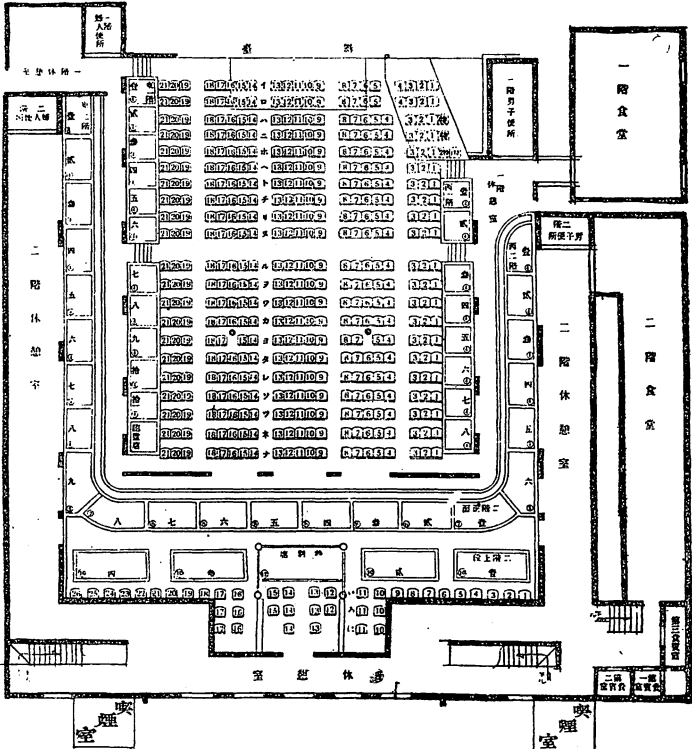
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

## 器 具 御 使 用 料

器 具 備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料 晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同 同 普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺 晝 夜	1回	10圓
活動寫眞設備 晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同 晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ 晝 夜	1回	20圓
音樂譜面臺 晝 夜	1臺	10錢
アークスポット 晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット 同 大(1000W) 小(500W)	1臺	5圓
サイド・ライト 500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット 100W 500W	1臺	3圓
サスペンションライト 100W 500W	1臺	2圓
フットライト 20W 100W 7球	1本	1圓
ゼラチンペーパー	1枚1回	1圓
大 衝 立 晝 夜	1對	5圓
演 壇 設 備 同	1回	2圓
其 他 必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラガエータ使用料		無料

# 文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も右席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處へ御自由にされます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一番で御座ゐます切符賣場右指定席切符は當日發賣も正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尚多人數様お團體様のお申込も御相談いたします。



爽やかな新秋のお料理とお飲み物

南直營 一文樂座食堂御案内

洋食堂 (西館階上)

親御食事、五品御飯(香物)	親子井	吸付辨當	和食堂 (西館階下)	スビード・テイナ	(御定食)	スライ(海老、魚)	オムレツ	ピロフカツケ	ピロフカツケ	チキンカツレツ	チキンカツレツ	ビーフステーキ(五分間)	カレーライス	チキンライス	コールドチキン	コールドハム	コールドビーフ	マカロニ・チーズ	アスパラガス	サンドウィッチ	ソーダ水(特製)	文楽スベツシアル	ビーフステーキ		
二、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	
五〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇	二	四	四	五	五	五	四	三	五	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	

ソードビスケット	チキニヤツク	コニヤツク	ウイスキー	ミリアネ	アブサン	ドライマテ	マンハツタン	文楽カクテル	アイスクリーム	アイスクリーム	紅茶	冷茶	ソーダ水(普通)	ダイヤレモン	特アサヒビール	菊正宗	お吸物	赤火	鐵火	雀火	ちり	らぎ	しり	司
二	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

酒場 (西館階上)

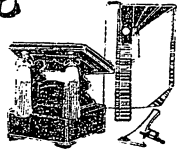
儀太夫海潮水本元

見物良夜共 津路道奥

電話船場  
一八六二番

加島屋 竹中酒助

大阪東區唐町四丁目御堂筋西へ入



◇文樂座御ひるき名簿募集◇

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい  
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けませぬ。
- 一、宛名は大阪市西區四ッ橋 文樂座編輯部宛の事。

文樂座の  
わかる處

「文樂今昔譚」特價 金貳圓

美しいグラフィック興味  
ある好讀物月刊雜誌

道 頓 堀 一部 金三十錢

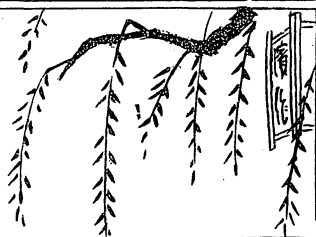
美しい原色版歌度劇  
采しい文樂座の包裝

文樂の繪葉書 二組 金十五錢

文樂座のお歸りはおはなつ  
濱作の前で一盞お召上り  
なり電話新四二六二番

濱作

町



**お食事は**

西側別館の階上、階下に食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食のバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

**賣店は**

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

**お化粧とお手洗**

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び場内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

**お煙草は**

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

**御携は帯**

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。すからそれをお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

**お出口は**

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

**貴重品は**

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帯願ひます。

**お場席は**

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居ります。お場席の番號をお忘れないうちにお願ひいたします。御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

**案内人へ**

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所にて御自由にお飲み下さい。蒸しタオルの準備も御座りますから御自由にお使用下さい。

**幕間中は**

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

**場内にて**

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は、乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

**出演者**

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

**當使用の御座**

正面西側本家茶屋階段下に御座います。文樂座指定の均タクが新車を揃えて玄關にお待してあります。

**お電話は**

自働車の御用は露臺にも

**四ツ橋**

**文樂座**

前賣切符専用電話南四七二番

電話南 七四〇八番  
三七八八番

爽やかな新秋にふさはしき

## 文樂座の御宴會

昭和五年八月廿日印刷  
昭和五年九月一日發行

大坂・四ツ橋・文樂座  
編輯兼  
發行人 大塚 良三

大阪市西區土佐堀通一丁目  
印刷者 永井太三郎

大阪市西區土佐堀通一丁目  
印刷所 永井日英堂印刷所

・新秋特別興行にかぎり・

(B) 金參圓五拾錢 (御一人様)

一階椅子席で御觀覽をねがひ  
お食事は快美な『ランチ』  
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

(A) 金四圓五拾錢 (御一人様)

一階椅子席で御觀覽をねがひ  
お食事は皆様本位の御定食  
(和食洋食兩様の設備が御座ります)  
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

□お申込は二十人様以上を受付申上ます。

□記念撮影のお寫眞は終演と同時に所持歸り出来るやういたして  
おります。

□お申込はお宴席其他の準備の都合上五日前にお願いたします

□お申込は四ツ橋文樂座事務室へお願ひします。

□お電話の御用は前賣専用南四七一・三七八八・七四〇八番へ

皆は方いし美で品上

# 粉白ブラク

鉛無良純



礮石イテカ

の良最  
礮石